教育研究所月報
548
平成22年（2010年）6月号

編集発行・横須賀市教育研究所／ 阿部優子
横須賀市久里浜6-14-3／ TEL（046）836-2443
〒239-0831 FAX（046）836-2445
URL.http://www.edu.city.yokosuka.kanagawa.jp
E-mail.admini@kenkyu.yknet.ed.jp

子どもと仲間づくり　～仲間とともに学ぶ～

◆小学校３年生、あるクラスでの学級開きの様子です。クラス替えで緊張する子どもたちの自己紹介の方法は、ビンゴカードを持ち、たくさんの仲間に自分の名前や趣味を紹介して歩くという工夫されたものでした。仲間のサインでいっぱいになったカードを大事そうに持ち帰り、保護者に友達の名前を読んで聞かせた子どももいたそうです。

子どもたちの緊張を解きほぐし、円滑な仲間づくりを進めたいと考えた担任の取組が功を奏しました。

◆学級開きで楽しいスタートを切った子どもたちに、次のステップとして、さまざまな場面で計画的・継続的に人間関係形成能力を育成することが求められています。

そこで学校では、行事や特別活動や道徳の時間などを通して、子どもたちのよりよい人間関係づくり、望ましい集団づくりを行う教育活動を展開しています。

仲間同士が豊かな人間関係と深い信頼関係で結ばれている学級では、授業においても互いに学び合い、高め合う学習集団を形成することが期待できます。教師の発問に対して、意見交換をしながら考えを深めていく姿や互いの意見を尊重しながら課題に取り組む姿、さまざまな子どもたちが自由に自信を持って発言する姿などが見られます。

子どもたちの人間関係形成能力を育成し、望ましい集団を作るには、特別活動や道徳の時間などとともに、日々の教科の授業や少人数による学習が大きな役割を果たします。

◆子どもたちの学習意欲を人間関係の側面から論じた「学ぶ意欲を育てる人間関係づくり」(2007中谷素之）の中で、杉江修治氏は、「協同的な、学習者中心の学習を進める中で育つ自主的な学習態度、互いを高め合う活動の中で育つ個人としての責任感、話し合いを通してコミュニケーション能力が育ち、相手に対する感受性を高めていくこともできる。これらの力が育つことによって、社会の一員としての責任を自覚した、民主的人格にまでつながる力を育てることにも貢献するのである。」さらに「協同が優れるのは、学習者同士の相互作用を通してなされる豊かな情報交流があることに加えて、仲間同士で高まり合おうという、相互の信頼関係に基づく望ましい人間関係が生む学習への動機づけがその大きな理由だと考えられる。」と述べています。このことからも協同的な学習は、人間関係形成能力が育つとともに、学習意欲が向上するという、多くの長所を秘めていることが分かります。

◆授業を通して、協同的な学びを展開するためには、教師が一方的に話をする講義形式、あるいは正解を答えさせる質問形式の授業ではなく、子どもたちが学習の中心となる課題の設定や学習活動を行っていくことが必要になります。また子ども同士の関係も、教えたり教えられたりすることが固定化し、特定の子どもの意見で話し合いが進んでいくことなどがないように配慮することや、一人一人が平等に協同的な学習に参加していくための条件づくりを整えることが大切です。これには、役割分担、討議の進め方、発表の仕方などをスモールステップで指導していくことが有効な手立てとなります。さらに、個人やグループが達成感を持てるような評価をしていくことも忘れてはいけないことの一つです。「はい、グループで考えてみよう」という指示だけでは、子どもたちの思考を深め、達成感を持たせることは難しいものです。

◆学級経営の観点から、あるいは学習意欲の向上という観点からも、仲間とともに学ぶことの意義を再検討し実践することが、今、まさに求められています。

（指導主事　吉川　知彦）

※参考　「学ぶ意欲を育てる人間関係づくり」中谷素之編著　金子書房　2007

この印刷物は、印刷用紙などの紙へのリサイクルに適した資材のみを使用しています。（用紙：Ａランク、インキ：Ａランク）

校内研修・研究で結ぶつながり

学校教育目標と研究テーマとのつながり

学校教育目標の実現のために行われるさまざまな教育活動の具体的な取組のひとつが校内研修・研究です。当然のように進めている校内研修・研究ですが、テーマについては改めて振り返ってみることが大切です。

抽象的な文言で表現された研究テーマをじっくりと吟味する時間が足りず、何をゴールとするのかを曖昧なままに研究を進めた場合、十分なPDCAサイクルが機能せず、結果として、達成感よりも疲労感ばかりが蓄積することにもなりかねません。

是非、校内研修・研究の推進にあたっては、教職員の共通理解を図るため、学校教育目標と研究テーマとの関連についての十分な話し合いを持ってください。その話し合いにより、1年間の研修・研究の意義を明らかにすることができ、各自が目的意識を持って取り組めるようになると思います。

そして、学校教育目標と研究テーマのつながりが明確になれば、さらに学年経営や学級経営へのビジョンにも結びつくはずです。

各教師が、この学級経営は確実に、この方向で研究テーマの実現、ひいては学校教育目標の実現につながっているのだという意識を持つことが大切です。その確かな思いが研究を進める原動力になるでしょう。

研究と日々の日常実践とのつながり

また、時間をかけた校内研究授業の教材開発や準備が、その公開授業のためだけのものになってしまい、もの足りなさを感じることはないでしょうか。

成果は得ても、それ以上の負担が重なることで、「研究授業とは特別な計画と労力を要する授業であり、それとは別に日常の授業準備は地道に進めなくてはいけない」といういう意識を生み出してしまっては、本末転倒と言えるでしょう。そもそも、日々の授業づくりこそが、研究テーマの具現化のための土台となり、目的にもなるはずです。

そのためにも研究テーマが、各教科の専門性、あるいは子どもの実態等に応じて、日常の授業にどう具現化されるのかを明確にイメージし、着実に実践を続ける段階にまで浸透していかなければなりません。

日々の授業を充実させることと校内研究は同じ目標のもとにあるのだということを、再度共通認識しておく必要があります。

協働性で深まる人と人のつながり

しかし、あらたまった研究協議の場だけが研修・研究の場ではありません。

職員室で子どものこと、授業のことを語り合うことができる学校では、有用な情報が交換されるだけではなく、さまざまな教育技術をも伝え合うことができる貴重な機会が生み出されているに違いありません。

例えば、子どもの意見やつぶやきの生かし方、効果的な板書、机間指導、時には子どもたちがわくわくするような教師のパフォーマンスなどの話題で盛り上がることがあるでしょう。基本的な教育技術や、それぞれの教師が長年の経験から培ったスキルまでを学ぶ有意義な研修になるでしょう。

このように、職場の良好な人間関係が、共通の教育目標を実現すべく深い協働性を発揮するつながりに発展することで、さらに研修や研究は深まり、授業の改善と充実がより一層図られることと思います。

各経験年数に応じた研修
校内研修でのつながりを

今年度から、２年次・６年次・11年次・21年次それぞれの教職経験者研修では、校内研修の充実に重点を置いています。各校では、ペアあるいはグループを作り、授業研究の計画が立てられた頃だと思います。

授業後の協議スタイルとして活用を勧めることは、子どもの発言記録をもとにした、授業リフレクション（振り返り）の手法です。

授業や発言の記録の仕方については、さまざまな手法がありますが、授業者から事前に課題となることや、着目すべき子どもを伝えておいてもらうことが有効です。

その子どもの記録をもとに、「今日の○○さんは、あのような発言をしていたが、その発言をしたわけや、○○さんの思いはどこにあるのだろう」「あの時の○○さんの発言の取り上げ方で悩みました。他にどのような対応が考えられるでしょうか」など、授業者が最も知りたいこと、解決したい課題に焦点を当てて、少人数で授業について語り合います。

授業研究を少ない人数で実施することにより、全体協議のような発言回数が限られがちな振り返りとは違う協議の場が生まれます。子どもの発言や活動をそれぞれがどう見取っていたのか、多様な視点から見つめ直し、子ども理解をより一層深めることにつながります。そして、何よりも、その子どもやクラス集団に適した指導のあり方をじっくりと考える研究となることが期待できます。

学校教育目標の実現を目指し、子ども一人一人が生きる授業づくりを実践しながら、さまざまなつながりを意識して、研修・研究を推進してください。

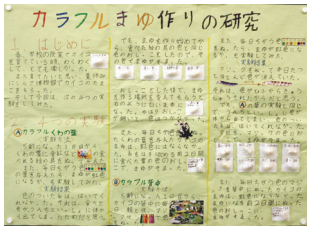
（指導主事　増田　喜明）

理科センターだより
広がれ！興味の輪

興味関心が広がるきっかけはさまざまな所にあります。ちょっとしたきっかけが、自主的な研究に発展した例を紹介します。

久里浜小学校６年佐々木雄大さんは、夏休みに浦賀ドックで開催される体験イベント「船と海を科学しよう」に参加しました。子どもが３人乗ることができる鉄製の船に、どれだけ荷物を載せられるかという実験をしました。そして、なぜ重い鉄の船が浮くのかということに興味を持ち、人が乗ることができる船を作るにはどうすればよいかを研究しました。研究の成果として、牛乳パックを使って、自分が乗ることができる船を製作しました。

この研究は平成21年度児童･生徒研究集録に「船のなるほど！」として掲載してあります。研究の感想の最後に「また興味を持ったことについて調べたいです」と結んでいます。



シルク博物館に展示された作品

田戸小学校４年佐藤優音さんは、３年生の時、理科の授業でカイコを飼育したことをきっかけに、「カラフルまゆ作りの研究」を行いました。カイコの体に油性ペンで着色すると、そのカイコが作った繭はほんのりと着色します。どうすれば繭がうまく着色できるか、また着色の特徴などを研究しました。この研究はシルク博物館のカイコ観察記録展示会に出品され、研究優秀賞を受賞しました。４年生になってもこの研究を続けていきたいと意欲を示しているそうです。

研究成果を発表することで、子どもたちに興味の輪が広がっていくことを期待します。

（指導主事　白井　宏一）

（研究研修担当：TEL　834-9308）

特色ある校内研修・研究の取組

「学びあう教師集団をめざして」

津久井小学校　教諭　島田 忠昭

本校では、「学びあう学習集団をめざして」～子どもの見とりを生かした授業づくり～をテーマに、研究を行っています。年間を通し、全員が公開授業を行い、全体やブロック、学年で協議会を開き、研究を進めています。

さらに、研究をより深め、私たち自身が「学びあう教師集団」となっていくための取組を行っています。

座席表指導案には、着目児（本時目標に対し、鍵となる児童）を設定し、①児童の見取り②教師の願い③願いを達成するための手立てを記載します。着目児を設定することで、授業者、参観者にとっても本時の目標や展開、子どもたちの「学びあい」の姿が見えてきます。

参観のポイントとしては、本時において、授業者が期待する具体的な子どもたちの学び合いの場面や姿を記載した参観のポイントを作成し、授業を観る視点をそろえ、協議の柱としています。

研究協議会では、まず、授業後に参観者が書いた付箋紙（感想や意見、見取りなど）を読み合い、見取った子どもたちの姿を伝え合います。そして、授業者がこれまでの取組やテーマ達成に向けた具体的な手立てについて自評をし、その後、なぜそのような姿が見られたのか、要因は何だったのか、改善すべき点はどこなのかなどについて、意見や考えを出し合います。このように子どもを中心においた具体的な協議を心がけています。

また、そのほかにも協議会場を楕円形にして教師同士の顔が見えるようにしたり、推進委員会だよりを定期的に発行したりと、研究の充実を図るための取組を行っています。

これからも、研究テーマ達成に向け、授業や協議を重ね、私たち自身も「学びあう教師集団」となれるよう、校内研究を推進していきたいと考えています。

チーム力向上を柱とした学校正常化への取組
～ユニバーサルデザインの視点を授業の中へ～

公郷中学校　総括教諭　下里 壽子

本校は古くからの住宅地や商店街を抱え、賑やかな所と静かな所が混在している学区です。明るく元気な生徒が諸活動に積極的に参加している一方で、さまざまな課題に苦慮している家庭や生徒の現状が見えてきました。

平成19年、夏休み後より生徒の様子に変化がでてきました。全体的に落ち着きがなくなり、規範意識の低下も見られ始めました。

全職員で指導の方向性を確認し、チームとして連携できるように研修会を持ちました。平成20年度には生徒指導の方針を保護者・生徒に明確にし「安全で安心できる学校」を取り戻したいことを強調しました。そして、学校・保護者・地域・関係機関が連携を深め、協力しあう関係づくりを目指しました。

平成21年度より、支援教育を基盤とした取組を始めました。「楽しい学校つくり小委員会」の活性化を図り、①開発的な教育相談の実施（スクリーニング・アセスメント）、②校内支援委員会の定例化、③通常学級の一斉授業で行なうユニバーサルデザインの研究、④個別指導でのスペシャルデザインの研究など、支援教育の構築に力を入れました。

特に、発達に課題がある生徒たちが理解しやすいように学習面からの支援として、全授業で共通した取組を入れました。①授業のねらい・流れの明示、②前面黒板の整理整頓、③視覚的・聴覚的・運動覚手立ての工夫などです。

平成22年度が始まりました。元気なあいさつ、不登校生徒の減少、落ち着いた授業風景など、今までの取組の手応えを全職員で感じながら、日々の指導を実践しています。